

# 隣の 息子

(隣のおっさん 2)

山牧田 湧進



まえがき

【ご注意ください】

- この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- この作品は必ずしも現実に即しているとは限りません。強調したいところを重点的に書き、不都合なところは端折っています。あくまでもファンタジーであることをご理解ください。
- 特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除して記述しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。

【あらすじ】

ボロ安アパートの隣に住んでいたおっさんが引越して、その後に入った人は僕より一つ年下でおっさんによく似た、おっさんと同じ苗字の人だった。

人懐っこく僕を頼ってくるそいつは、ある日突然、おっさんと同じ格好と言動を繰り返しながら、混乱する僕を抱いてきた。

おっさんの息子。しかし、その息子の真意は僕ではない、別の人へと向いていた。

・ 本間 歩（ほんま あゆむ）

物語上の一人称「オレ」。22歳の新入社員。隣のおっさんだった本間進の長男。進に良く似ているが、若干背が高く、若いせいか身が締まっている。入れ違いになるように進が住んでいた部屋に入居するが、当初は素性を隠していた。

•  
本間 進（ほんま すすむ）

物語上の一人称「俺」。47歳のサラリーマン。元隣のおっさん。引越してしまったが、仕事でこっちに来る機会があるときに、雅貴に逢いに來てくれる。ちよいデカ、ちよいデブ、見た目だけでなく仕草がいちいち格好良くて可愛くてエロい。本人はだらけているだけでも、目の前の人を欲情させちゃう小悪魔。

•  
木上 雅貴（きのうえ まさたか）

物語上の一人称「僕」。23歳、大学院生。心と身体の問題を進に解決してもらって充実した勉学生活。同時に進に恋もしてしまっただ、培った理性を活用して、感情とのバランスも取れるようになった。

## 【目次】

第一章	隣の息子	6
第二章	叶わぬ恋	27

# 第一章 隣の息子

僕の部屋のお隣さんは引越していった。

家具や荷物はほとんど、何故か、そのまま。けどもう、誰も居ない。

薄壁のボロアパートはちよつとした生活音でも聞こえてしまう。共に暮らしては居なくとも、部屋に居て起きている、あるいはいびきをかいている、くらのことは分かってしまう。

それが、今はシーンと静まり返ったままだ。このアパートは各階に二部屋ずつしかないから、今は本当に静かだ。

静かになって、勉学に集中できて良い。普通ならそう思うだろう。

でも、隣のおっさん、本間進さんは僕を魅了して止まない、素敵なおっさんだった。恋心もあり、憧れでもあった。

いつかは僕も、あんな素敵なおっさんになりたい。自分の身体を見回して、自分の顔を100均の手鏡で見てみる。

あ、こりや無理だ。時既に遅しだ。背丈も骨格も今からじゃおっさんに追いつけない。顔は言うまでもなく負けている。

でも、せめてちよつとは身体を鍛えるくらいのこととはしておかないとな。

本間さんは47歳。もうそろそろ48か。だらけた服装をしているとなかなか気付かないが、実は40前だと言われても疑わないほどかつちりとした顔、身体をしている。中身はしつかり47だと本人は言っただけだが、それでも、僕よりも体力があるかもしれない。

その本間さんが、歳を取ってくるとまずはきちんと体調を整えないことにはやりたいことも出来なくなってくる、やりたいとも思えなくなってくる、とそう教えてくれた。

勉強だけやっていこうとしても、そう遠くない将来、衰えた身体に引き摺られて満足にできなくなる時がやってくる。なるべくそうならないために、体力と健康。土台をしっかりしておかないと。

とはいえ、貧乏苦学生の僕がトレーニングジムなど通えるわけでもなく、機器を買い込むのもなんか微妙だ。いきなりそんな形から入らなくても、できることはたくさんある。腕立て伏せ、腹筋、背筋、だけじゃない。

例えば、目を瞑って片足立ちしてみる。すぐにぐら付くが、それを何とか堪



えようとすると足首や脛脛周辺が鍛えられる、同時に自律神経も鍛えられる。

手と手を合わせて押し合うだけでも筋トレになる。肘と肘で押し合うようにすれば胸筋にもくる。

そして、手鏡を覗いて、いろんな顔をしてみる。うわつ、キモい。見たくない気持ちを抑えて、表情筋も鍛える。少しでも、良い表情ができた方が、それはそれで、その方が良いだろう。ベースはほとんどどうしようもないけど、本間さんと同じように仕草で積み増しできる魅力もあるのだから。

本間さんとは完全にお終いではない。状況が許せば、また逢うこともできる。ただ、無理はしないし、させたくない。本間さんには本間さんの人生と家庭があつて、僕とのことはその中の隅っこのごく一部でしかないからだ。

でも、今度もし、逢えたときに、少しでも成長した自分を見せることができる、なんて思う。

隣の空き家状態は一ヶ月近くに及んだ。まあ、単純に考えれば、そんな簡単に次の住人が入ってくるとは限らないわけで、数ヶ月空いたとしても全然おかしくはないのだが。

夜、まださほど遅くは無い時間に、僕の部屋のドアがノックされた。

「夜分恐れ入ります。隣の部屋に越して来ました、本間と申します」

「ほ、本間さん？」

あの本間さんの声にちよつと似ている、でも、本間さんだったら今更こんな言い方しないだろうし、ちよつと声が若い。僕は慌ててドアを開けた。

「初めまして、本間と申します。隣の部屋に越して来ましたので、よろしくお願いします」

「あ、木上です。よろしく願います。あの、本間さんて」

「はい？」

「あの、荷物とか、まだ、部屋に残ってますよね」

「ああ、前の方が使って良いと譲ってくださいまして」

「え？ ああ、そういうことなんですか」

「オレも家財道具とか全然持っていないんで、助かりました」

『前の方』か。苗字の一致は偶然なのか。『本間』って姓はそんなに多いんだっただけ？

「前の方も本間さんって方だったので、びっくりしました」

「あ、そうですね。オレもびっくりでしたよ。ところで、木上さんて、

ひよつとして同い年だったりしますかね？ オレ、22で今年23なんですけど」

「あ、僕は23で今年24なんです1こ上ですね」

「そうでしたか。お兄さんでしたか。いろいろとご迷惑お掛けするかもしれませんがよろしくお願いします」

「あ、いえいえ、こちらこそ、よろしくお願いします」

それにしても、本当に他人とは思えない。本間さんよりもやや背が高く、本間さんよりも少々ゴツい。若いせいか本間さんよりも角張った感じに見える。

歳だって、本間さんは結婚して24年になるって言っていたから、これくらいのお子さんが居てもなんら不思議は無い。でも、子供の話は一度もしなかったなあ。

でも、あの物言いは他人のそれだった。なんだか、混乱する。

本間さんの部屋に行けなくなってから随分になる。今は逆に、偶にはあるが、新しく部屋に入った若い本間くんがちよつとした物を借りに来たり、返しに来たり程度だが僕の部屋に訪れる。

ただ、その日の晩はちよつとした、では済まない借り物だった。

「木上さくん。済みませくん」

また、何か足りない物でもあるのかな？ と思いながら、ドアを開ける。

「どうしたの？」

見ると、洗濯カゴに目一杯洗濯物を抱えた本間くんの姿が。

「あの、うちの洗濯機が壊れちゃって、新しいの買おうとしたんですけど、給料日前で、で、もう着れるもなくなっちゃって。済みませんが洗濯機使わせてもらえないですか？」

「あ、ああ、そうなんだ。良いよ、どうぞ」

「済みません。お邪魔します」

「大変だったねえ」

「ええ、困っちゃいました」

洗濯物を洗濯機に放り込む本間くんを眺めていると、途中まで僕は気付いていなかったのだが、連休だったせいや普段のヒゲ以外にもうっすらと無精髭が生えた本間くんは益々、本間さんに似ているように見えた。って、その格好は、本間さんのスウェット！

「す、進さん」

思わず口にしてしまつて、ハツとした。ところが、

「どうした？ 兄ちゃん」

# 隣の息子

(隣のおっさん 2)

Author 山牧田 湧進  
(Yamakida Yuushin)

Circle Gradual Improvement

URL [graduali.blog.fc2.com](http://graduali.blog.fc2.com)

個人で楽しんでいた作品です。

個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、共有、アップロード等はしないでください。

(こちらは体験版です。)